

## 夢への道程～世界一速い男を目指して

F1 アメリカグランプリで、佐藤琢磨選手が日本人としては14年ぶりに3位入賞を果たしました。予選の結果はよいものの、車のトラブルなどで3戦連続エンジブローによるリタイアという運にも見放された結果が続いていただけに、本人はもちろん多くのファンにとっても待ちに待った表彰台でした。

しかも今回のレースは作戦のミスもあり、いったんは10位まで順位を落としてからの巻き返しであったため、次々と他の車を抜いていく佐藤選手のドライブは実に圧巻でした。スタート直後には「赤い皇帝」の異名を取るフェラーリチームのM・シューマッハがあらさまに佐藤選手を牽制するシーンも見られ、日本人ドライバーががいよいよ世界一を争う領域に達したことを実感させてくれました。

F1は単にドライバーの運転操作技術が優れているだけでは優勝できません。根本的に速く走れる車でなければ勝てないのです。このことは当たり前のように聞こえるでしょうが、この「速い車」をつくるためには、ドライバーの能力が大きく影響します。タイムを1/100秒の世界で短縮するためには、それぞれのサーキットにあわせてエンジン・車体・タイヤを調整・改良しなければなりません。そのためには、ドライバーが各エンジニアに的確な指示を出さなければならないからです。さらに莫大な開発費用を調達するスポンサーを集めることまでもドライバーの力量の一つです。

佐藤選手は2002年にジョーダンチームからF1にフル参戦しましたが、ポイントはおろか完走することもままならない成績に終わりました。車の開発状態がとても上位をねらえる状況にはなかったからです。2003年、彼の選んだ道はBARホンダチームの開発担当ドライバーという地位でした。望めばF1ドライバーを続けることもできたかもしれなかったのに、1年間あえて「浪人」したわけです。世界中に20数名しかいないF1スーパーライセンスを持ったドライバーにとっては、表舞台であるレーシングシートを降りて裏方に回ることは、本来の望むべき道ではないはずです。一度そのシートを失えば、翌年に降に復帰できる可能性は極端に低くなるのがこの世界なのです。しかし彼は回り道しました。この1年間に、より速い車の開発に携わるとともに、エンジニアやチームスタッフとの信頼関係を築くことに成功しました。その努力が今年のBARホンダの驚異的な進歩につながったことは、チーム自身が一番よくわかっているはずです。

夢を高く掲げることは大切です。しかし、夢を夢で終わらせないためには、目先のことにだけがんばるだけでなく、大局的に物事を捉え、ときには一歩下がって足元からしっかり固めることが必要なときもあります。

今の勢いからすれば、佐藤選手が表彰台の一番高いところに上がる日も夢ではないでしょう。